Nara Women's University

老人福祉施設で生活する高齢者の社会交流と生活圏域に関する研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 齋藤功子 公開日: 2012-05-25 キーワード (Ja): 家族, 高齢化社会, 高齢者, 社会, 生活圏, 老人福祉施設 キーワード (En): 作成者: 齋藤,功子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/3042

第７章　結　　論

本研究は，老人福祉施設の計画に際する基礎資料となり得ることを目的とし，老人福祉施設で生活する高齢者の社会交流と生活圏域の実態把握を行い，それらを規定する要因を分析し，考察したものである。本章では，各章で明らかとなった事柄を要約して結論とする。

第１章では，本研究の目的と背景，および研究方法を示すとともに，老人福祉施設で生活する高齢者に関する既往研究，および高齢者の社会交流や生活圏域に関する既往研究を概観しつつ，本研究の位置づけを明確にした。また，本論文の構成について述べた。

第２章では，軽費老人ホームを対象に考察を行った。軽費老人ホームは，老人福祉法に規定される入所施設の内，身体状況の自立度の高い高齢者を対象としている施設であり，入所は個人と施設の契約に基づくこと，居室は個室であることに特徴がある。軽費老人ホーム入所者の社会交流と生活圏域に関し，施設内外の交流と外出行動の側面から，入所者231名を対象とした面接調査によりその実態を把握した。施設内の交流については，施設行事への参加，クラブ参加，施設内友人数および友人とのつきあいの程度を指標とし，施設外交流については施設外サークルへの参加，施設外友人数および友人とのつきあいの程度を，外出行動については外出内容別の頻度と外出手段を測定のための指標とした。結果は，以下のように要約できる。

(1) 施設内外の交流・外出行動に関し，身体状況（ＩＡＤＬ，視力，聴力，階段昇降）の高レベル群は，低レベル群に比較して活発な活動水準にある。身体状況のレベルは，入所者の施設内外にわたる交流および外出行動を規定する第一義的な要因であるといえる。

(2) 施設内交流の内，行事参加・クラブ参加では施設が参加率を規定する第一の要因である。クラブの設置状況は施設により大きく異なり，設置数の多い施設ほどクラブへの参加率は高い。施設内交流に関し，性別では女性は男性に比して，クラブ参加，友人との交流は活発であり，このことは入所者の性別構成比が遠因になるものと推察できる。

(3) 施設の居室条件の違いが，施設内交流に与える影響に関しては，居室面積と居室ドアの形態が入所者相互の居室訪問に影響を及ぼすものと推察できた。居室面積が狭小である場合，施設内交流の一形態である居室訪問を阻害する要因として捉えることができる。居室ドアが引き戸の場合，入所者相互の居室訪問の機会創出に寄与することが伺えた。

(4) 日常生活に関わりの深い外出行動（買物，理美容，散歩等）では，施設からの徒歩圏内の商業施設の有無が外出頻度を規定している。外食・映画・美術館等への外出や家族・友人と会うなど，行動圏域や対人交流に広がりのある外出行動では，施設の立地する都市の規模により外出頻度に差がある。また，施設からの公共交通機関へのアクセスが外出頻度に影響を与えている。

(5) 外出手段の側面より外出行動をみると，交通アクセスの影響が大きく，身体状況高レベル群において，より強くその影響を受けている。また，行政施策による交通機関の老人無料パス制度は，入所者の外出行動の広域化に寄与している。

第３章では，養護老人ホームを対象に考察を行った。養護老人ホームは，軽費老人ホームとは異なり，行政による措置施設であり，入所に際し経済的要件を必要とする。また，身体状況の点で，中度の介護を要する者を対象としており，居室は原則として２人以下である。入所者の社会交流と生活圏域について，入所者208名を対象とした面接調査により，実態把握を行った。社会交流および生活圏域に関して，施設内外の交流や外出行動の側面より実態把握を行った（施設内外の交流および外出行動を測る指標は，「第２章軽費」と同様である）。分析，考察の結果は，以下のように要約できる。

(1) 施設内外の交流・外出行動に関し，身体状況（ＩＡＤＬ）高レベル群は低レベル群に比して活発であり，身体状況のレベルは，入所者の施設内外にわたる交流の程度を規定する第一義的な要因である。

(2) 施設外サークルへの参加者は少数であるが，市部に立地する施設の入所者の参加率が高いことが挙げられ，特に前住地が入所施設に近接するケースが多見されることに特徴がある。

(3) 施設外の友人の有無およびつきあいの程度に関し，男性は女性に比べその程度は希薄である。また，入所期間の長期化により，友人とのつきあいが希薄になる傾向がある。

(4) 外出行動の中心的な内容は通院・買い物である。外出目的別に外出の有無を規定する要因析出の結果，外出目的により規定要因が異なることが判明した。通院では主観的健

康感・施設・身体状況が外出の有無を規定し，買い物では施設・身体状況・入所期間が，その他の外出では身体状況，施設，入所期間が外出の有無を規定している。外出行動全体の頻度では，身体状況，本人前住地，施設が外出頻度を規定している。外出目的に関わらず，身体状況および施設は外出の有無を規定する上位の要因であり，徒歩圏の生活環境が外出行動に深く関わることを指摘できる。

(5) 外出行動を外出手段から捉えた場合，施設からの交通機関へのアクセスが影響しており，徒歩圏の商業施設の有無などの生活環境が関わると理解できる。

第４章では，特別養護老人ホームを対象に考察を行った。特別養護老人ホームは，身体上または精神上著しい障害があるため，重度の介護を必要とする高齢者を対象としている施設であり，行政による措置施設であるが入所に際し経済的要件は含まない。入所者622名を対象とした調査により，入所者の社会交流と生活圏域に関する実態把握を行った。入所者の社会交流と生活圏域に関し，居室外行動の側面より把握することとし，食事場所，衣服様態，行事参加，クラブ・リハビリテーション参加，外出行動を測定指標とした。考察結果は以下のように要約できる。

(1) 居室外行動は，身体状況（ＡＤＬ），痴呆症状の程度により大きく影響を受け，特にＡＤＬ低レベル群とＡＤＬ高中レベル群における居室外行動の差が著しいとともに，痴呆症状が重度である場合とその他の場合における差が著しい。

(2) ＡＤＬ低レベル群と痴呆症状重度の者（心身状況低レベル層）の居室外行動に関し，特に外出の有無や衣服様態において施設による差異が大きい。また，開設年次の古い施設では食堂への移動率が低い。

(3) 居室外行動を規定する要因を析出の結果，第一には施設の違い，第二には心身状況の程度によって規定されることが判明した。

第５章では，老人福祉施設の入所者と子供，兄弟，その他親族，友人との交流（以下，家族交流と総称す）に関して実態を把握し，その規定要因について考察を行った。家族交流の形態に関し，軽費老人ホーム，養護老人ホームでは，面会（家族が施設を訪問），訪問（入所者が家族宅を日帰りで訪問），外泊および電話のやりとりにより把握した。特別養護老人ホームについては，面会と外泊により把握することとした。結果は以下のように要約できる。

軽費老人ホーム・養護老人ホームについては,

(1) 家族との交流形態別の頻度に関し，電話による交流頻度がもっとも高く，ついで面会・外泊・訪問の順に頻度は高い。

(2) 交流形態別に交流頻度を規定する要因析出の結果，面会頻度は子供の有無・施設種別・身元引受人の現住地に規定されることが判明した。電話頻度は施設種別・身体状況に，訪問頻度は身体状況・施設の立地する都市の規模に，外泊の有無については入所前の家族形態・身体状況に規定されることが判明した。

(3) 面会頻度と電話頻度に施設種別が影響していることは，施設設備の条件面から説明することができる。面会頻度は，居室が個室であるか否かが関わるものと推察でき，電話頻度は，居室に配された専用電話の有無が深く関わっている。また，訪問頻度には施設の立地する都市の規模が要因となっており，このことは交通アクセスの影響によるものと推察できる。

(4) 家族交流の相手として子供の占める割合は高く，子供のいない者は，子供のいる者に比べ，兄弟，他の親戚を交流相手とする割合が高い。友人との交流は，子供の有無の影響を受けない。

(5) 友人との交流の特徴を施設種別でみると，軽費老人ホームでは，入所期間の長期化に伴い交流が希薄になることが特徴的である。養護老人ホームでは，入所者前住地と施設との距離関係からの影響がみられ，同一市町村よりの入所者の友人交流は高い。友人との交流形態では，電話がもっとも多い。

重度の介護を要する者を対象とする特別養護老人ホームについては,

(6) 面会に関しては，大多数の者が月に１人以上の面会者があるものの，外泊については外泊なしの者が過半数を超える。

(7) 面会人数，外泊の有無を規定する要因析出の結果，面会人数では施設，入所前の家族形態，子供の有無が，外泊の有無では施設，子供の有無，ＡＤＬがそれぞれの規定要因であることが判明した。

第６章では，老人福祉施設入所者の社会交流や生活圏域を第一義的に規定する身体状況という要因を取り除き考察を行うことにより，社会交流の活性化や生活圏域の広域化に関わる要因の析出を行い考察した。分析対象は，軽費老人ホームおよび養護老人ホーム入所者の内，身体状況の高レベルの者である。また，社会交流の活性化や生活圏域の広域化が

入所者に与える影響に関し，重度の介護を要する特別養護老人ホーム入所者を対象に考察を行った。その結果は以下のとおりである

(1) 社会交流および生活圏域を測る指標として用いた施設内の行事参加・クラブ参加・友人数・施設外のサークル参加・友人数および外出頻度に関し，施設種別が第一の規定要因となるのは施設内友人数，施設外友人数である。

(2) 施設種別が第一の規定要因である施設内外の友人との交流程度に関し，特に施設内友人との相互の居室訪問という交流形態の場合，施設種別による交流程度の差は著しく，施設種別による居室条件（居室面積，個室か否か）の相違が交流程度に相当の影響を与えているものと指摘することができる。

(3) 特別養護老人ホーム入所者のＡＤＬ，痴呆症状，問題行動に関し，その変化について時系列に評価を行った結果（施設職員の主観的評価）と，入所者の居室外行動，家族交流の側面より入所者の類型化を図ったものを対比し分析を行ったところ，ＡＤＬの向上変化には，社会交流の活性化と生活圏域の広域化による影響を指摘することができる。

以上のように，老人福祉施設で生活する高齢者の社会交流と生活圏域の実態を把握し，その規定要因に関し考察を行った。入所者の身体状況は，社会交流の程度や生活圏域の広域化（狭域化）に関わる第一義的な要因であるが，身体状況を問わず，施設環境が入所者の社会交流や生活圏域に影響していることを指摘できる。

そのため，食堂等の共用室の充実，居室に関しては居室面積の拡大，個室化，専用電話の配備により，施設の内外にわたる社会交流の拡大を期待することができるであろう。施設の立地条件が入所者の社会交流や生活圏域に与える影響は，特に身体状況が高レベルの入所者に大きく，徒歩圏域の生活環境，具体的には生活諸施設や交通アクセスに配慮した施設整備（立地）は入所者の社会交流の活性化や生活圏域の広域化を促進するものと指摘できる。このことは，加齢に伴う身体機能の低下を考慮した場合も，同様に指摘することができる。また，入所前の社会交流の継続を可能にするという施設の立地条件の側面からは，前住地に近接する施設への入所（措置），あるいは施設の計画的整備の重要性を指摘することができる。

以上に述べた社会交流の活性化と生活圏域の広域化が，重度の介護を要する入所者にあっても身体状況の維持向上に関わるものであることを指摘することができるため，老人福祉施設で生活する高齢者の社会交流の活性化と生活圏域の広域化の重要性ならびに施設計

画に際しての一定の視点を提示することができたものと考える。今後は，ケアハウスやグループホームなど研究対象とする施設の拡大，社会交流および生活圏域に関してのより適正な指標の検討，および施設と地域社会との関わりの側面より，高齢者居住施設の考察を行うことが研究課題であると考える。

本論文に関連する発表論文

原著論文

論文題目および発表者	発表機関および年月日	関連章
特別養護老人ホーム入所者の居室外行動と人的交流に関する調査研究 齋藤功子，西村一朗	家政学研究 Vol. 40 No. 2 (P51-60) 1994年(平成6年)3月	第４章 第６章
軽費老人ホーム入所者の施設内外の交流と外出行動に関する調査研究 齋藤功子，西村一朗	日本建築学会計画系論文集 NO. 487 (P87-95) 1996年(平成8年)9月	第２章
老人ホーム入所者の家族交流を規定する要因 齋藤功子，西村一朗	日本家政学会論文集 Vol. 48 No. 10 (P915-923) 1997年(平成9年)10月	第５章
養護老人ホーム入所者の施設内外の交流と外出行動に関する調査研究 齋藤功子，西村一朗	日本建築学会計画系論文集 NO. 506 1998年(平成10年)4月掲載予定	第３章 第６章

口頭発表

論文題目および発表者	発表機関および年月日	関連章
千里ニュータウンにおける高齢化社会に対応した住環境に関する研究 齋藤功子，西村一朗，今井範子，久保妙子	日本建築学会大会（仙台市） 日本建築学会大会学術講演梗概集 (P299-300) 1991年(平成3年)9月	第１章
在宅要介護老人の日常生活と住環境条件に関する研究 齋藤功子，西村一朗，今井範子，久保妙子	日本建築学会大会（新潟市） 日本建築学会大会学術講演梗概集 (P101-102) 1992年(平成4年)9月	第１章

論文題目および発表者	発表機関および年月日	関連章
特別養護老人ホーム入所者の社会生活広域化に関する研究　－その１　調査概要と空間的広域化－ 齋藤功子，西村一朗	日本建築学会大会（東京都） 日本建築学会大会学術講演梗概集 (P497-498) 1993年(平成5年)8月	第４章
特別養護老人ホーム入所者の社会生活広域化に関する研究　－その２　人的交流広域化－ 西村一朗，齋藤功子	日本建築学会大会（東京都） 日本建築学会大会学術講演梗概集 (P499-500) 1993年(平成5年)8月	第４章
軽費老人ホーム入所者の生活行動に関する研究 齋藤功子	日本家政学会大会（奈良市） 日本家政学会大会研究発表要旨集 (P313) 1995年(平成7年)5月	第２章
軽費老人ホーム入所者の日常生活における社会性に関する研究　－その１　入所者特性と施設内外の交流－ 西村一朗，齋藤功子	日本建築学会大会（北海道） 日本建築学会大会学術講演梗概集 (P1-2) 1995年(平成7年)8月	第２章
軽費老人ホーム入所者の日常生活における社会性に関する研究　－その２　外出行動と入所者の類型化－ 齋藤功子，西村一朗	日本建築学会大会（北海道） 日本建築学会大会学術講演梗概集 (P3-4) 1995年(平成7年)8月	第２章
養護および軽費老人ホーム入所者の家族交流に関する研究 齋藤功子，西村一朗	日本家政学会関西支部研究発表会（奈良市） 日本家政学会関西支部研究発表会講演要旨集　(P26) 1996年(平成8年)10月	第５章

謝　辞

本論文の終わりにあたって，研究の遂行および本論文の作成において，終始一貫して熱心にご指導ならびにご鞭撻を賜りました奈良女子大学生活環境学部教授　西村一朗先生に深く感謝いたします。本論文の作成にあたり，適切なご助言ならびにご教示いただきました奈良女子大学生活環境学部教授　石川実先生，同教授　磯田憲生先生に深く感謝いたします。また，常に暖かくご助言ならびにご教示いただきました奈良女子大学生活環境学部教授　湯川利和先生に厚くお礼申し上げます。さらに，奈良女子大学名誉教授，武庫川女子大学教授　梁瀬度子先生には，退官後も引き続きご指導を賜りました。深く感謝いたします。奈良女子大学生活環境学部教授　今井範子先生，同助教授　中山徹先生，同助手　中村久美先生，聖母女学院短期大学専任講師　久保妙子先生には常に暖かい励ましとご助言をいただきました。厚くお礼申し上げます。

また，関西大学工学部教授　荒木兵一郎先生，兵庫教育大学教授　菊沢康子先生(故人)，近畿大学理工学部専任講師　知花弘吉先生，大阪産業大学工学部助教授　竹嶋祥夫先生，摂南大学工学部教授　田中直人先生，和歌山大学システム工学部助教授　足立啓先生，摂南大学工学部助教授　岩田三千子先生には福祉のまちづくり研究グループにおける共同研究においてご指導を賜るとともに，本研究のご助言をいただきました。厚くお礼申し上げます。

最後に，研究のためとはいえプライバシーに関わることを寛容し，調査にご協力下さいました各施設の入所者の皆様，職員の皆様に厚くお礼申し上げます。